

令和元年6月24日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02428

研究課題名（和文）汪兆銘政権勢力下における日本語文学状況の基礎的・発展的研究

研究課題名（英文）A fundamental and developmental study of the circumstances of Japanese literature under the influence of Wang Jingwei administration

研究代表者

木田 隆文（KIDA, Takafumi）

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：80440882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、汪兆銘（精衛）政権統治下の中国で展開した日本語文学の実態を究明すべく、その基礎資料の整備および現地邦人文学者・文学団体の動向調査を実施したものである。研究期間中には上海・北京・天津・台湾などの海外並びに日本国内の図書館での資料調査や、国内の古書市場に残る資料の購入を行い、研究基盤の整備を進めた。それら収集資料のうち、雑誌『大陸』をはじめとした重要資料については、雑誌特集号や論文、学会発表等で成果報告を行った。また関連分野の研究者と連携し、東アジア各地に残存する日本語資料とその活用に関するシンポジウムの実施や、雑誌細目の刊行を行い、今後の研究的展開を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

かつて多くの日本人留民が暮らした戦時下の上海および長江流域の各都市では、日本語による文学や雑誌が数多く刊行された。しかし戦後の混乱によってその多くは散逸し、彼らが行った文芸文化活動の実態はほとんど解明されてこなかった。

本研究はその失われた書籍・雑誌類の発掘・収集を行い、同時期の中国大陸における日本の文化活動の実態を検討することを目標とする。それは過去の失われた歴史的事実の再発掘であるとともに、日中の歴史的関係性とその問題を文化交渉の側面から考えてゆく契機となるはずである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to investigate the state of Japanese literature developed in China under Wang Jingwei's administration, and serves as an establishment of records relating to its foundations as well as an investigation into the trends of Japanese writers and literature organizations. During the study, the establishment for the research's foundations were implemented by investigating records found in libraries within Japan and overseas, as well as purchasing remaining records in domestic antique book markets. The results regarding the essential records among those collected, such as the magazine "Tairiku", were reported by utilizing the journal articles, conference presentations, and others. Additionally, future research developments were planned by collaborating with researchers in related fields to organize a symposium on remaining Japanese language records found in various parts of East Asia and their applications, as well as to publish a journal on the details.

研究分野：日本近代文学

キーワード：外地文学 汪兆銘政権 上海 武漢 中支 武田泰淳 文化支配

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

進展著しい外地日本語文学研究の中でも、上海をめぐる議論は近年特に活性化している。しかしその一方、上海と密接な関係を持っていたはずの、南京・蘇州・杭州・武漢等の長江流域各都市の日本語文学の状況は、ほとんど顧みられることはなかった。

だがそれは、各都市に検討すべき課題や文学活動がなかったことを示しているわけではない。かつて木田は、科学研究費基盤(B)「戦時上海の文芸文化と邦字新聞「大陸新報」に関する多角的研究」(平成19~21年度、研究代表・大橋毅彦)に参加し、同紙記事に見られる現地邦人作家による文学団体の動向調査を担当、独自に記事内容分析と関連資料収集を進めてきた。その結果、上海現地最大の邦人文学者団体である上海文学研究会が、南京・蘇州といった周辺各都市の文学者・文学団体との連携を行っていた事実を確認し、その一端を複数の論文や学会発表において報告した。さらに平成25年度から3年間にわたっては、自らが研究代表を務める科学研究費基盤(C)「日本統治下上海を中心とした中支各地域における日本語文学状況の基礎的研究」によって数次の海外調査を行った。そしてその過程で、南京・杭州・武漢等の図書館に一定数の日本語文学資料が存在している事実を把握し、同時に、武漢・南京などの現地文化・文学者団体が発行した雑誌や資料類をいくつか見出すことができた。これらの研究的蓄積によって、徐々に長江流域に存在した邦人文学団体やその出版物の存在、そこに掲載された現地日本人文学者の具体的な創作活動の実態、上海と各都市間の文化ネットワークの可能性、などが見えてきただけでなく、長江流域各都市の日本語文学活動が、上海に匹敵するほどの水準と規模をもって展開していたことが確認されたのである。

2. 研究の目的

そこで本研究は、日本統治下の上海および長江流域で展開した日本語文学の状況を検討すべく、具体的に以下4点の課題目標を設定した。

- 現地邦人文学者および邦人文学者団体の実態確認
- 現地文学者・文学団体の交流状況の追跡
- 現地日本語文学メディアの実態確認
- 現地文化政策と、現地文学活動の相関性の検討

本研究がこうした課題を設定したのは、単なる資料整備・事実確認だけを目標とせず、文学と周辺領域の複合研究を意識したためである。例えば、の検討課題は、中支各都市間および内地との間で取り交わされる日本人文学者の移動と交流の様態や、日中文学者の文化的接触/摩擦の考察へと発展する可能性を感じさせる。また、では、現地日本語文学の形成・発展と現地メディア・出版状況の関係性の検討や、現地文化政策と現地文学・文学者の力学関係の究明など、文学周辺の問題にも押し広げてゆくことが想起できるためである。

そしてなにより、こうした検討を進めることは、日本近代文学研究の中でも特に問題意識が高まっている外地文学研究の空白を埋めることになるだけでなく、植民地文化研究全体の進展に寄与することが予想されるためである。

3. 研究の方法

長江流域の日本語文学状況を考えるうえで、本研究では特に汪兆銘政権という座標軸を設定している。それは時間的・空間的に検討範囲を絞り込むことで問題意識を散漫化させない方法であるとともに、同政権が現地の日本語文学状況に大きな影響を与えていると推察されるためである。

今触れたように、長江流域には明治初期から活発な日本人の進出が見られた。しかしその文学的な環境が整った時期は意外に遅い。上海においても1930年代末までは小規模な短歌・俳句サークルの活動や、内山書店に集まった文化人たちによる雑誌『万華鏡』等が発行されていたにすぎなかった。そしてその状況は長江流域の各都市においてもおおそ同じ状況であったと思われ、各都市間の目立った文学的交流も行われることはなかった。しかし1940年3月の汪政権成立直後から、その勢力下にあった長江流域の各都市の文学状況は一変する。親日政権であった汪政権の勢力範囲は、当然ながら日本の統治政策の強い影響下にあり、そこでは日本の文化統治政策がさまざまに推進されていった。たとえば同年7月には、日本大使阿部信行大将の政権への働きかけにより、国策文化団体である中日文化協会が南京に成立し、それに伴い長江流域一帯の各都市にその分会・支会が設置され、機関誌等の印刷・出版体制が整えられてゆく。その結果、活動の場を求めた現地文化人・文学者とその分・支会に結集し、各地で協会名義の出版物に文学作品が陸続と発表されることとなった。またすでに1939年に上海で刊行されていた国策新聞『大陸新報』も、1940年に日本人作家を結集した長江文学会、その後継団体である上海文学研究会を結成、『長江文学』『上海文学』といった文学雑誌の発刊を援助した。こうした状況を見ると、長江流域各都市において小規模・散発的にしか行われなかった日本語文学活動が、1940年の汪兆銘政権成立を機とした日本の統治政策の強化によって、急速に拡大・組織化されたことが見てとれる。つまり汪兆銘政権を座標軸に据えることは、特殊な政治的事情の下で展開した現地文学の状況をより闡明に浮かび上がらせることになると思われるからである。

そこで本研究では、まず汪政権の文化政策を確認すべく、すでに入手済みの中日文化協会の関連文献や、『大陸新報』、『同・武漢版』などの現地媒体、各主要都市の都市要覧などをもとに、

政権支配下の文化政策の実態を把握することを試みた。そのうえで各都市の文芸文化団体・作家・関係者とその動向を抽出・整理し、文献調査項目のピックアップと、文化動向と人的ネットワークを検討する基礎データを作成した。

またこれまでの研究において、汪政権勢力下にあった都市の日本語文学状況が等閑視されて来たのは、その資料不足が最大の理由であった。そこで本研究では、特に現地発行の日本語文学関連資料の発掘・収集には特に力を注いだ。すでにこれまでの調査において上海図書館徐家匯蔵書楼には多数の関連文献があることが判明しており、調査は同館を中心に行ったが、同時に汪政権勢力下にあった各都市の図書館・档案馆での資料探索も試みた。さらに国内でも、国会図書館・日本近代文学館・東洋文庫などの主要所蔵機関の調査を中心に進めつつ、古書市場にも目配せをし、広範囲で資料の収集に努めた。

そしてそれらの基礎資料の整備とともに、判明した事実については随時その成果を学会・論文等で発表した。その際、特に中国・東アジアの研究者が参加する国際学会や、日本上海史研究会など、関連・隣接領域の学会での報告を行うように心がけ、幅広い知見から検討が進められるように意識した。

4. 研究成果

4-1 資料発掘と研究基盤の整備

上記で述べたように、当該分野の研究の立ち遅れは資料整備がほとんど進められていなかったことに原因がある。そこで本研究では、特に資料探索を軸とした研究基盤の整備に力点を置いた。そのため、国内外の所蔵機関での調査収集を数次にわたって行った。その結果、いくつかの新資料の発見とともに、国内外各機関の所蔵状況を確認することができた。

在外資料の調査・収集

海外図書館の所蔵状況については、以前に行った科研の調査(「日本統治下上海を中心とした支各地域における日本語文学状況の基礎的研究」平成26~29年)において、ある程度の状況を把握していた。そのため、まずは多くの資料の所蔵が確認できた上海図書館徐家匯蔵書楼を調査拠点図書館とし、現地発行の日本語文芸書籍および関連資料の写真撮影をすすめた。その代表的な成果としては、作家・武田泰淳の逸聞が収録された書籍『神鷲』(1945年4月、神鷲敬仰会)を発見したことが挙げられる。またその調査の過程で、上海図書館本館にはOPACに登録されていない関連文献が多数あることが確認され、新たに有益な文献調査の糸口を見出すことができた。

それ以外の海外図書館について、当初は湖北省図書館・漢口市図書館(武漢)、南京図書館(南京)を調査の予定としていたが、湖北省図書館・南京図書館については事前リサーチで閲覧予定の資料が所在不明であることが判明、漢口市図書館については、移転の結果資料の確認が困難になったことがわかり、調査を実施できなかった。しかし計画段階では調査先に予定していなかった中国国家図書館(北京)・天津図書館(天津)にも関連資料があることが判明し、そちらの図書館での資料探索を実行し、いくつかの関連文献の入手を行うことができた。また本研究が対象とした旧汪政権支配地域とは離れているが、国立台湾図書館にも資料の一部があることが確認できたため、所蔵状況調査を行った。

なおこのように旧汪政権支配下の範囲外で関連文献が発見されたことは、汪政権支配下の文芸文化の活動がより広範囲に波及していたことを想像させ、今後の研究課題として、文化と人々のネットワークを東アジア全体で考察してゆく必要性を確認することができた。

国内資料の調査・収集

国内資料の調査については、主に国会図書館・日本近代文学館・東洋文庫・愛知大学豊橋図書館、九州大学図書館などで実施し、汪政権支配下の各地で刊行された書籍はもちろん、特に大陸刊行の日本語新聞や総合雑誌等の収集を重点的に行った。ただ、当該分野の資料は、多くのものが図書館・資料館に未所蔵であるため、常に古書市場に目配せを行い、積極的な購入を行った。それによりこれまでその存在が十分に確認できなかった『大陸』(大陸新報社刊)や『華北詩人』(北京文化協会)などの文芸媒体を収集・確認することができ、後述するような研究的展開を得ることができた。

資料および研究情報の公開

国内外での調査を通して発見された新資料のうち、特に重要な意義を持つものは論文や学会等で報告を行った。そのうち武田泰淳の逸文が収録された『神鷲』や、戦時上海で刊行され、多くの著名作家が寄稿した雑誌『大陸』の発見については、論文化はもちろん新聞メディア等を通してその意義を説明することで、一般にも広く研究成果の還元を行った。

またこれまでの研究を通じて収集した資料の一部についても、『中国関係雑誌細目集覧』(2018年12月、三人社)で目次と概要を公開し、他の研究者の利便を図った。

4-2 汪政権勢力下の文芸文化状況の解明

武田泰淳を軸とした日本統治下上海の文芸環境の解明

本研究が対象とする汪政権勢力下の各都市のうち、上海はその文化的中心都市であった。そのため本研究でも上海の文芸文化状況の解明に力点を置いたが、その軸に据えたのは現地の文学団体・上海文学研究会と、そこに参加していた作家・武田泰淳の活動であった。特に今回の調査では、武田泰淳・池田克己らの上海文学研究会会員が、国策新聞『大陸新報』誌上で行われ

た文学懸賞イベント「神鷲特攻隊文学奉賛」に審査委員として動員されていたことが判明した。またさらに上海図書館徐家匯藏書楼の調査において、同文学懸賞の入選作品集『神鷲』を発見し、そこに武田泰淳の逸文「神鷲」が掲載されていたことを確認した。それらの発見報告とそれに基づく上海居留民社会の文学状況の考察は、拙稿「武田泰淳「神鷲」の後景 - 日本統治下上海の文学懸賞」(『国文学論叢』62 輯、2017 年 2 月)において報告した。

他にも武田泰淳の関連資料として、大陸新報社が刊行した雑誌『大陸』(第 2 巻 2 号・同 3 号、1945 年 2 月・3 月)を入手したが、奇しくもその直後に北京外国語大学の秦剛氏も他号を発見、両者の発見分を合わせることで、これまでほとんど存在が知られていなかった同雑誌の全貌が明らかになった。その発見については秦剛氏の尽力により『早稲田文学』(1027・1028 号、2018 年 3 月・5 月)誌上で 2 回にわたって特集が組まれ、その情報を広く学会に還元することに協力した。またその特集(1028 号)には木田も「失われたパズルピース 武田泰淳「城隍廟付近」と『大陸』」と題する論考を寄稿し、そこで『大陸』掲載の武田泰淳の新資料「城隍廟付近」の持つ意義と、それに協力/抵抗した現地作家たちの複雑なありようを論じた。

なお他にも武田泰淳に関する論考として、彼が関与した中日文化協会上海分会の翻訳事業を検討した「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業 武田泰淳「上海の螢」を手掛かりとして」(『アジア遊学 戦時上海グレーゾーン 溶融する抵抗と協力』、勉誠出版、2017 年 2 月)を発表、そこで戦時末期の上海で展開した文学とプロパガンダの抜き差しならない関係を明らかにした。

「上海漫画家クラブ」を軸とした上海の文化状況の実態解明

本研究課題は主に現地の文学状況の解明に力点を置いていたが、隣接する文化領域との関係を確認するために、同時期に現地に存在したさまざまな文化団体の実態解明にも取り組んだ。

その中で本研究が注目したのは「上海漫画家クラブ」である。同会は日本人漫画家らが軸となり、そこに中国人・欧米系漫画家が参加していたが、その成立は上海文学研究会などと同じく大陸新報社の意向を反映したもので、いわば翼賛漫画団体として活動することが期待された団体であった。だがその会員たちの活動の消長を検討すると、国策的な欲望に対して抵抗/協力する日本人漫画家たちと、表面的な協力を偽装する中国人漫画家、さらには同会をイデオロギーと無縁の創作活動の場として利用した欧米系漫画家といった、日本の文化支配に対する多様な反応を確認することができた。こうした芸術家たちの政治的対応は文学側の人間とも共通するものであり、大陸新報社の翼賛言論政策が上海の文芸文化活動に根深い影響を与えていること、それゆえに文化人たちの活動が常に翼賛への抵抗/協力/忍従といった問題と不即不離の関係にあったことが明らかになった。なおこれら上海漫画家クラブに関する検討は、拙稿「上海漫画家クラブとその周辺 「大陸新報」掲載記事を手掛かりに」(『戦時上海のメディア 文化的ポリティクスの視座から』、研文出版、2016 年 10 月)で報告した。

汪政権勢力下各都市の文芸環境の実態解明

汪政権勢力下各都市の文芸文化状況については、資料調査において特に成果が得られた武漢(漢口)を中心に検討した。これまで武漢日本人居留民の文化活動についてはほとんど検討がなされてこなかったが、今回の調査の結果、特に現地の文化団体である中日文化協会武漢分会の出版物が複数発見され、現地の文化事情や活動実態がある程度判明した。また同時に現地の出版・文化事業のキーパーソンともいえるべき内田佐和吉等の存在が確認され、さらなる調査を進めるための基礎情報が整備できた。

また武漢については、本研究課題の開始以前に『武漢文学会雑誌』『武漢文化』『武漢歌人』といった現地刊行の文芸雑誌を入手しており、今回はその分析に取り組むことで、武漢居留民社会で展開した文学の具体的な解明を行った。その結果、当初は武漢居留民の文学活動が上海を凌駕する勢いで行われていたこと、そしてそれが日本の統治の進行とともに中日文化協会などの国策文化団体に取り込まれ、結果として壊滅させられたという状況があったことを解明した。また同時に、武漢の文化活動が常に上海や内地の文芸政策を鋭敏に反映していたことや、武漢文学会と汪政権勢力下各都市にあった文学団体(上海文学研究会・蘇州文学...)の間に資料交換や人的な移動があったことも確認できた。それら成果は、「汪兆銘政権勢力下の日本語文学 上海・南京・武漢を中心に」(昭和文学会・台湾日本語文学会姉妹学会締結記念国際シンポジウム「東アジアの日本文学研究の可能性と課題」、2018 年 6 月 16 日、於・東京女子大学)「汪兆銘政権勢力下の短歌 『武漢歌人』をめぐる」(5 科研連合研究集会「東アジアにおける日本語資料 外地文化研究の現在」、2018 年 12 月 15 日、於・奈良大学)で報告を行い、学会内外に武漢居留民文化研究の重要性を広くアピールした。

なお今回の研究課題では、上海・武漢といった長江流域の都市だけではなく、華北の汪政権支配領域である北京・天津などの文学状況についても資料調査を進めた。特に今回の調査では北京の文学団体の発行した詩誌『華北詩人』を発見したが、その分析からは上海文学研究会などの長江流域の文学団体との交流があったことが確認できた。そしてそのことは、これまで各都市単位で行われてきた外地日本語文学の研究を、東アジア各都市間の文学的ネットワークから再検討する必要があることも示している。

4 - 3 他分野・在外研究者との連携活動

本研究課題はその特性上、中国側研究者との連携が不可欠である。そのため上海社会科学院歴史研究所現代史研究室主催「中日学者中日関係史研究者交流会」等の国際研究集会で報告・討

議を行い、中国側研究者との情報の共有を行った。

また本研究は検討範囲と資料調査先が複数の地域にまたがり、他都市を課題とする研究者との連携も欠かさない。そのため隣接する研究課題に取り組む科研に呼びかけ、研究情報の交換と発信を行う研究イベント「5 科研連合研究集会 東アジアにおける日本語資料 外地文化研究の現在」(2018 年 12 月 15 日、於・奈良大学)を主催した。それにより各地域における資料の残存状況や調査の可能性、地域ごとの研究的視点などの情報を共有・検討し、研究情報を広く学会に還元することを試みた。なお共催した研究課題と代表者は以下のとおりである。

- 16K02428 「汪兆銘政権勢力下における日本語文学状況の基礎的・発展的研究」(木田隆文)
- 16K02426 「野上弥生子『台湾』及び台湾関連日本近代文学の史的・文学的価値に関する複層的的研究」(渡邊ルリ)
- 17K02098 「植民地朝鮮におけるセクシュアリティ言説研究」(光石亜由美)
- 17K02484 「戦前期の中国・樺太で刊行された日本語図書(文学関係中心)の書目総覧の作成」(竹松良明)
- 18K00335 「日本占領下華北における日本語文学の様相に関する基礎的・発展的研究」(戸塚麻子)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- 木田隆文、「武田泰淳「神鷲」の後景 - 日本統治下上海の文学懸賞」、『国文学論叢』、査読無、62 輯 2017、321-332
- 木田隆文、「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業 武田泰淳「上海の螢」を手掛かりとして」、『アジア遊学 戦時上海グレーゾーン 溶融する抵抗と協力』、査読無、2017、152-166
- 木田隆文、「覚え書き・パラオ日本語文献資料探訪」、『第 31 回地理学科海外研修プログラム「外国研修・海外研修」in Palau』、査読無、2018、21-25
- 木田隆文、「失われたパズルピース 武田泰淳「城隍廟付近」と『大陸』、『早稲田文学』、査読無、2018 年初夏号(通巻 1028 号) 2018、209-218
- 木田隆文、「大東亜の 外国人 - 接触空間としての上海漫画家クラブ」、『立命館言語文化研究』、査読無、30 巻 1 号、2018、61-69
- 木田隆文、「中国的支那 と 西洋的支那 のはざままで 武田泰淳「月光都市」にみる上海と建築」、『アジア遊学 建築の近代文学誌 - 外地と内地の西洋表象』、査読無、226 号、2018、95-112

〔学会発表〕(計 6 件)

- 木田隆文、「文化ポータルとしての中日文化協会 武田泰淳の活動を例に」、日本上海史研究会主催ワークショップ「戦時・上海・グレーゾーン 抵抗と協力のはざままで」、2016
- 木田隆文、「大東亜 の欧州人 日本統治下上海における欧州系外国人へのまなざし」、2017 年度立命館国際言語文化研究所連続講座「越境する民 接触 / 排除」、2017
- 木田隆文、「汪兆銘政権勢力下の日本語文学 上海・南京・武漢を中心に」、昭和文学会・台湾日本語文学会姉妹学会締結記念国際シンポジウム「東アジアの日本文学研究の可能性と課題」、2018
- 木田隆文、「戦後上海の文芸文化研究をめぐる幾つかの課題」日本上海史研究会、2018 年 8 月例会「戦後上海の「体験」 - 人びとの模索・移動・記憶」、2018
- 木田隆文、「汪兆銘政権勢力下の短歌 『武漢歌人』をめぐって」、5 科研連合研究集会「東アジアにおける日本語資料 外地文化研究の現在」、2018
- 木田隆文「日本統治下上海における<文学場>の形成 長江文学会「土曜文藝」『長江文学』を視座として」、上海社会科学院歴史研究所現代史研究室主催「中日学者中日関係史研究者交流会」、2019

〔図書〕(計 3 件)

- 高綱博文他編(木田隆文)、研文出版、『戦時上海のメディア 文化的ポリティクスの視座から』、2016、367
- 木田隆文・堀井弘一郎編、勉誠出版、『アジア遊学 205 戦時上海グレーゾーン 溶融する抵抗と協力』2017、239
- 戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会編(木田隆文)、三人社、『戦前期中国関係雑誌細目集覧』、2018、463

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。